

コントの社會連帶思想 (一)

米田庄太郎

緒言

夫れ第十八世紀に於て著しく發達せる個人主義的思潮が、社會的政治的生活に於て徹底的に適用されるに於ては、佛國大革命は當然起らざるを得なかつたので、同大革命は個人主義的思潮の發達の社會的政治的一頂點を表示するものと認め得られるのである。併し同大革命は果して其の豫期の結果を齎したかと云ふに、決してそうではなかつた。舊社會組織の破壊が完成されなかつたと同様に、又新社會組織は確立されず、社會生活は益々混亂に陥つた。而して革命思想の遵奉者は、之を革命の不完全に歸し、新社會組織の確立は、只益々革命思想を徹底的に實行することによりてのみ成就され得るものであると説いたが、併し夫れと同時に先づ革命思想其物に絶對的に反對し、革命思想の實行不完全なるが爲めに、社會は安定しないのでなく、革命思想其の物が根本的に謬つて居て、人間の精神を邪路に導けるが爲めに、社會は

安定しないので、革命思想が斷然排斥されるに非らずは、社會は永久に安定せず、只革命に革命が續起するばかりであると論ずる人々が現はれた。是れ傳統派の哲學者等である。

傳統派の哲學者等が、先づ革命思想の根本的謬見と考へたるものは、其の個人的理性を最後の權威として樹立し、其の上に立つ何等の權威をも認めないと云ふ點であつた。彼等の考へる處によれば、個人的理性を最後の權威と見ることは、つまり何等の權威をも認めないことになる。個人的理性の上に立ち、之を支配するものが、即ち眞の權威であるので、而してかゝる權威が認められて、此處に始めて思想界の統一が保たれ、社會的秩序が確立されるのである。然らばかゝる權威となるは如何なるものであるかと云ふに、夫れは即ち普遍的理性である。而して普遍的理性は個人に於て實現されるものでなく、歴史に於て實現されるものである。歴史的に實現される普遍的理性は、それが即ち眞の權威である。吾人はかゝる權威を認めることにより、始めて社會の安定を望み得るので、革命思想の根本原理たる個人的理性の思想は、根本的に謬れるものである。夫れは思想界の混亂及び社會的秩序の紊亂の根本原因である。

傳統派の哲學者等が、更に革命思想の根本的謬見と考へたるは、夫れが個人を本來獨立し、孤立するものと見る點であつた。彼等の考へる處によれば個人は決して獨立し、孤立するものでなく、空間的にも亦時間的にも、相互に依存し、相互に連帶關係を有するものである。而して單に個人が社會を作ると云ふのでなく、社會が又個人を作るのである。個人を離れて社會の存しないと同じく、又社會を離れて個人は存しない。

要するに傳統派が革命思想に對抗して樹立せんとせる根本原理は、權威の思想と社會連帶の思想とであつた。而して此の二つの思想に於て、傳統派は第十九世紀の佛國社會思想の發達に、甚だ重大なる影響を及ぼしたので、今日種々なる社會思想或は社會哲學的思想に於て、根本的なる一原理と認められて來た社會連帶思想は、大革命後先づ傳統派によりて、唱道されたものである。詳しくは拙稿「傳統派の社會連帶思想」『經濟論叢』大正十一年十月及び十一月號を見られたい。

今佛國大革命後、革命思想に反對して先づ勃興せる傳統派は、右に述べし如く權威の思想及び社會連帶の思想を根本原理として之れと争ふたので、かくて佛國の社會思想界は根本的には二派に分れて來たのであるが、此の際に更に兩派に對して第三

派が勃興して來た。夫れはサン、シモン派であつた。サン、シモンは革命思想の進歩主義を承認すると同時に、其の個人主義を排斥し、又傳統派の權威の思想及び社會連帶の思想を承認すると同時に、其の復古主義、反動主義を排斥したので、要するに權威の思想及び社會連帶の思想を基礎として、社會の眞實なる進歩を圖らんとせるものである。換言すればサン、シモンは革命思想の進歩原理と、傳統派の秩序原理とを調和して、以て社會を根本的に改造し、新しき社會を建設せんとしたのである。而して彼の社會思想は大に社會主義的傾向を帯びて居たが、併しまだ嚴密に云ふ社會主義ではなかつた。詳しくは拙稿「サン、シモンの社會改造哲學」〔經濟論叢大正十二年一月號〕を見られたい。然るに彼の思想を祖述すると稱するサン、シモン派の人々、殊に其の牛耳をとれるアンファンタン及びバサルは、サン、シモンの思想を社會主義に發展させ、又之を大に宗教的なものに發展させたのである。詳しくは拙稿「サン、シモン派の社會改造哲學及び連帶思想」〔經濟論叢大正十二年二月號より目下連載中〕を見られたい。而してサン、シモン派に於ては、權威思想及び社會連帶思想は進歩思想と結合して、特異な形態に於て極端に發展されたのである。

却説オーギュスト、コントは、早くサンシモンから離れて獨立したが、併し一時は大

に彼を崇拜して居たのである。而してコントは彼の社會哲學の根本思想を、サン、シモンから學んだと云ひ得られるのである。後彼はサン、シモンに對して大なる反感を抱き、サン、シモンより何物をも學ばなかつたと言明して居るが、併し夫れはコントの爲めには、悲しむ可き忘恩の言である。と云はねばならぬ。もつともサン、シモン自身がコントから學んだ處も、少なくなかつたと思はれるが、しかもコントの哲學の根本原理となつて居る幾多の思想は、彼がサン、シモンの門に入り、兩者が相接する以前に、サン、シモンが粗雜な形態に於てあるが、既に説いて居たものである。此の事は後に論ずる處によりて明らかにするが、とにかくコントは彼の社會哲學の根柢として居る進歩思想と權威思想及び連帶思想との調和を、サン、シモンから始めて學んだものと思はれるのである。併し此處に本論文に於て、コントの連帶思想の發達を研究せんとするに當つて、余が特に讀者に注意したき點がある。夫れはコントは、彼をして早くもサン、シモンから離れさせた彼の思想の特有の傾向によりて、社會連帶思想を特異な方面から發達させたことである。即ち彼は先づ科學の連帶を高調したが、夫れより進んで社會連帶を説いたのである。要するに彼の社會連帶思想は、科學連帶思想によりて確立されたのである。詳しくは後に述べるから、此處には只右の特

色を指示するに止める。而して是れよりコントの社會哲學の發達を全體から概觀しつゝ、特に彼の社會連帶思想の發達を考究することゝする。

(一) 第一期に於けるコントの連帶思想の發達

コントの思想生活の發達は、一般に三期に別たれて居る。第一期は彼の思想體系の準備期にして、明白に何時頃から始まつたとは云ひ難いが、大體上千八百十八年彼がサン、シモンに無名で書簡を送つた頃から始まり、而して千八百三十年に、彼が「實證哲學講義」第一卷を公にし始めた頃まで續くものと、見做し得られる。第二期は彼の「實證哲學大成」の時期にして、千八百三十年「實證哲學講義」第一卷を公にしてより、千八百四十二年其の第六卷を公にせるまで續く。而して夫れより千八百五十一年「實證政治學體系」第一卷を公にするまでを、實證政治學の準備期として、之を第三期から區別することも出来るが、又之を其の中に込めてもよい。何れにしても、第二期は實證哲學大成の時期であるに對して、第三期は實證政治學大成の時期である、而して夫れは千八百五十七年彼の死去せるまで續くのである。但しコントの哲學は、一般に「實證主義」と稱せられて居るが併し、彼は實證哲學と實證主義とを區別して居た様に思

はれるので、第二期間には彼は常に實證哲學と云ふ語を用ひて居て、實證主義と云ふ語を用ひて居ない。而して第三期に於て彼の盛んに用ひた實證主義なる語の意味は、勿論實證哲學を含んで居るが、併し彼の實證主義的倫理及び宗教と稱する、理想主義的な倫理及び宗教の體系を、特に強調するものゝ如くに思はれる。されば吾人は又、第二期を實證哲學の時期と稱するに對して、第三期を實證主義の時期と稱することも、出来るのである。

余は先づ本節に於て、コントの思想發達の第一期即ち準備期に於ける彼の社會連帶思想の發生を、考究しようと思ふのであるが、此の時期の研究は彼の實證哲學及び實證政治學、人間教の眞義并に彼の在世の時から重大なる問題となれる兩者の關係即ち兩者の間に統一あるや否やと云ふ問題を、正當に解決する爲めに甚だ肝要なるものである。併し此處には主として、其の期間に於ける彼の社會連帶思想の發生を究明することを眼目として、只其の一般を考察するに止める。但し此の時期の研究資料として重要なものは、コントが特に重要視して、實證政治學體系の附録とせる六論文 (*les opuscules primitives de l'auteur sur la philosophie sociale*。尙ほ此等の六論文は、實證主義協會より單行本としても出版されて居る。其の題名は *Opuscules de philosophie*

socialé) 千八百十八年にコントがサン、シモンに送れる書簡 (Requête, Notice sur l'oeuvre et la vie d'Auguste Comte. P.P. 367-370) 及び友人ヴァラへの書簡 (Lettres d'A. Comte à M. Valat, 1815-1844) 等である。

コントが千八百十八年即ち彼が二十歳の時サン、シモンに無記名で送つた書簡(其の書簡によりて彼は、サン、シモンに學才を認められ、夫よりサン、シモンの愛弟となつた)は、吾人が彼の思想を學び得る、最初の重要な文書の一であると思ふが、其の中に彼は先づ、サン、シモンの思想に従ふて、經濟學を改造し、實證的政治學即ち事實の觀察に基く科學的政治學を建設するの必要を論じ、次に倫理學も政治學と同様に科學的に改造するの必要を述べ、而して終りに社會改造の最急務或は第一の仕事は、科學的或は理論的なるものにして、健實なる實際的社會改造策は、只實證的理論的社會學フシヤンスツト或は政治學に基いてのみ、樹立され得るものなるを論じて居る。此處には特に彼が倫理學の改造に關して述べて居ることに就て、彼の社會連帶思想は實際上如何なる形態に於て、先づ彼の思想に現はれたかを考へて見よう。

コントは倫理學の改造に就て左の如く述べて居る。

「私は貴下に、後に倫理學に關する或考察を呈出することが出來ると思ふ。蓋し

私は倫理學も全く政治學と同じく、新たに作らる可き一學問であると考へるからであります。そうして今日世に汎く流通して居る處の、甚だ尊敬す可き又甚だ有益なる倫理の諸原則を駁撃する考へは、毫も持つて居ませぬが、とにかく其等の諸原則の不充分であることを、注意するのは決して不當でないと思ひます。其等の諸原則の總ての中で、最も大なる又最も廣布して居るもの、即ち隣人の愛の原則は、實際上一の情操の表現に過ぎないもので、行爲の規則ではありません。殆んど總ての他の原則も同様であります。今夫れ自身に於て最も尊重す可き情操も、其の作用が實證的知識によりて導かれぬ時には、社會の幸福に對して殆んど無効であり、時としては甚だ有害であることさへもあります。此處に隣人の愛、殆んど總ての他の原則は、其の種々なる改變に外ならぬに就て考へるに、若し此の原則が其の適用に於て、隣人に對して有益である手段の知識によりて導かれぬならば、屢々他人の利益が夫れから生じ得ないことは、明白でありませんか。善き意向が知識の不足によりて、屢々甚だ有害な行動に導くと云ふことは、普通な觀察の事實であります。されば一層肝要なことは、人々に於て一定の情操を産出せんと求める事でない。是れかゝる總ての努力は、殆んど常に無益或は無効であるからで

あります。併し夫れは同胞に有益である可き手段を、人々に教へることによりて、人々が動かされる情操を、種屬の爲めに利用せんと求めることで、ある可きであります。是れ自然は、人々が明らかに其の手段を覺るや否や、相互に有益である可き機會を、決して失はないだけ相互に他を愛する傾向を、人々に賦與して居るからであります。

されば吾人は、社會的秩序を顛覆せんとする慾望を有すると云ふ非難を受けることなしに、世に汎く流布する倫理の諸原則に就て、左の如く考へ又言明することが出来ると思はれます。即ち其等の諸原則は總て只情操或は感情に過ぎないが故に、全く不充分であること、及び夫よりして、總て此等の原則は、何れも總ての點に於て社會の眞の利益に合致することを承認しながらも、吾人は尙ほ一の實證的倫理學の構成を望み得ること等であります。而して倫理學は政治學と同じく、經濟學に接木されねばならぬと思ひます。是れ私は倫理的規則は、政治的制度と同じく、夫れが生産の上に及ぼす、或は及ぼし得る影響に従ふて、判斷されねばならぬと考へるからであります。一切の倫理的慣習及び性向、一例を擧ぐれば慈善の如きものを、此の見地から考へて、又始めて宣言的でなく全く實證的に判斷して、吟味す

るほど興味あることはありませんまい。是れ貴下の思想が貴下を導いて、貴下をして當然到着させる點であります。しかも貴下は此の事を忽そかにして居られます。す。(Robinet, Notice sur Pœuvre et lavie d'Auguste Comte. P. 368)

今右に引用せるコントの言葉によりて、彼は始めから隣人の愛とか人間の自然的相愛とかを承認することによりて、實際的に社會的連帶を認めて居たことが察知し得られる。彼は後には社會性を以て人間本有の傾向或は本能と認め、之を社會形成の根本的一原理として立て、居るが其の思想の萌芽は右の言葉の中に、明らかに、洞察され得るのである。然らばコントは右の書簡によつて、サン、シモンに學才を認められ、其の門に入りて後、サン、シモンの影響を受けつゝ、彼の思想の發達するにつれて、彼の社會連帶思想は現實に如何に發達して來たか。

コントが始めて公にしたる論文は、千八百十九年六月サン、シモンの雑誌 *Censeur* に於て發表した短論文「識見と慾望との一般的分離(或は區別)」(*Séparation générale entre les opinions et les désirs*)である。(Systeme de politique positive. Tome Quatrième. P.P. 1-3) 此の論文に於てコントは、政治的慾望は民衆より發出するものなるが、之を實現する意見或は識見は、政治學を觀察學として之を専門的に研究する哲學者によりて立てらる可

く、而して之を實行するは政治家或は爲政者である可きものなるを論じ、つまり政治的識見と政治的慾望とを區別し、分離すると同時に、又其の必然的結合或は連結を究明せんと企だてゝ居るのである。此處に吾人は後に彼が益々重要視せる理論と實際との區別及び其の連結或は結合の必要が、明らかに指示されて居ることを見る。要するに吾人は本論文に於て、コントの連帶思想は、實證的に區別され分離されたる理論と實際との必然的連帶の思想として、先づ發展されて居ると考へることが出来るのである。

コントは右の一短論文を公にして後、翌年四月に長論文を發表するまでに、友人ツアラに彼の學問的斷想や希望を述べたる、幾多の書簡を送つて居るが、其の中には彼の思想の發達を研究する爲めには、甚だ重要な意味を有するものがある。殊に其の一 (Lectres d'A. Comte & M. Valade, XIII) に於て、彼は内省法を排斥するに至れる經路及び理由を述べ、又彼の實證哲學即ち一切の科學の一般的哲學の概念を、始めて明らかに説述し、更に後彼の實證哲學の一樞軸たる諸科學の連帶 (*la solidarité des diverses sciences*) を強調して居る。而してさきにも一言せし如く、社會に於ける個人の連帶即ち社會連帶に關する彼の思想は、科學の連帶の思想によりて確立されたものである。

から、此處に右の書簡中、特に科學の連帶に就て彼の述べて居る事を抜き出して置く。

「今日化學或は生理學に於ける一定の方法を數學に移し又數學の一定の方法を、化學或は生理學に移すことの有益なるは、争はれないことである。しかも人々は之をなさない。何故であるか。是れ各科學者は只自分の特殊な科學のみに熱中し、他の科學に援助を與へようとも、亦他の科學者から援助を受けようともしないからである。併し此の如き状態では、何れの特殊科學も眞に進歩し得ないのである。されば各科學に對して特に只其の諸方法を觀察し、之を比較し、之を概括し、之を完成する爲めにのみ専心する科學者の一部類の存することが必要である。更に總て其等の科學者の上に、只其等の種々なる特殊哲學を觀察し、之を比較し、之を概括し、之を其の相互の關係によりて完成することによりてのみ専心する、一般的哲學者の一部類の存することさへも必要である。」

吾人は右の言葉によりて、コントは後に益々重要視せる科學の連帶及び一般的哲學の概念を、既に明らかに立てゝ居たことを學ぶのである。

コントが準備期に於ける第二の論文として重要視せる長論文「近世的過去の總體の概評」(Sommaire Appreciation de l'ensemble du passé moderne)は、千八百二十年四月に公に

されたものであるが、本論文はコントの社會類型論及び社會進化論の根本思想の發生を研究する爲めに、隨ふてコントの社會學の要部、即ち彼の社會動學の根本思想の發生を研究する爲めに、甚だ肝要なるものである。(Système de Politique Positive, Tome Quatrième, P.P. 446) 彼は本論文に於て先づ中世紀に於て完成し確立せる舊社會體系或は舊社會類型と、近世に於て發達しつゝある新社會體系或は新社會類型とを區別し、前者は宗教と武力或は教會と封建制との二大社會的勢力の合同及び協力によりて成立し、後者は科學と産業との二大社會的勢力の合同及び協力によりて成立す可きものと考へ、而して宗教的及び武力的なる戰鬪的社會から、科學的及び産業的なる平和的社會へ漸次に推移するのが、社會進化或は進歩の根本法則であると考へたのである。尙ほ彼は本論文に於て、彼の社會進歩論或は社會改造論の最とも根本的な一原理と認める靈權と俗權との分離及び協働の思想を、始めて明白に又かなり詳しく論述して居る。而して彼の社會連帶思想の發達を考察する見地から見ると、吾人は本論文に於ては彼の連帶思想は、新舊社會體系は夫れ夫れの社會的勢力の連帶關係によりて成立し、又其の連帶的發達によりて發達するものであると云ふ形態、及び本質的に區別される靈權と俗權との連帶的關係によりて、完全なる社會體系が確

立され、且つ發達するものであると云ふ形態に於て、發展されて居ると認めることが出来るのである。

第三の論文「社會改造の爲めに必要な科學的仕事の考案」(Plan des travaux nécessaires pour réorganiser la société)は、千八百二十二年に始めて公にされたが、コントは更に千八百二十四年に、多少の修正を加へ、且つ「實證政治學體系」(Système de politique positive)と改題して、之を公にして居る。併し彼の最後の大著作「實證政治學體系」の附録には、始めの題名で載せて居る。(Système de Politique Positive. Tome Quatrième. P.P. 47-136)此の論文はコントの實證哲學及び社會學の形成を研究する爲めには、甚だ重要なものにして、「實證哲學講義」の殆んど總ての根本思想は、大體上此論文中に論述されて居るのである。又コントが當時の學界に於て、其の學力を始めて認められたのは、此の論文によるのである。ヘーゲルの如きも、此の論文を大に賞揚したと云ふ。而してコントの實證哲學の大要を學ぶには、此の論文は今日に於ても甚だ有益であるので、エネルギー哲學の創設者とも云ふ可きオストワルト氏は、千九百十四年に自から序論及び附註を加へて、其の獨逸譯を出版して居る。(Auguste Comte, Entwurf der wissenschaftlichen Arbeiten welche für eine Reorganisation der Gesellschaft erforderlich sind. Deutsch herausgegeben

en, eingeleitet und mit Anmerkungen versehen von Wilhelm Ostwald. 1914)

コントは本論文に於て彼の實證哲學の概念、科學の連帶、科學の位階的秩序社會進歩の法則即ち三状態の法則、實證政治學の概念等を始めて組織的に稍々詳しく論述して居るのである。而して夫れに伴ふて又彼の社會連帶思想も更に發展されて居る。併し此處に之を述ぶるは、後に「實證哲學講義」に於ける彼の大成せる思想を述べる場合と、重複するから省いて置く。而して第一期の残りの論文に於て、彼の實證哲學の思想が如何に發展されて居るかを簡單に述べて本節を終り、次節に於て特に彼の完成せる社會連帶思想を論究し、更に最後の節に於て彼の社會連帶思想の應用と見て、彼の實證政治學體系及び人類教を論究することとする。

第四の論文「科學及び科學者の哲學的考察」(Considérations philosophiques sur les sciences et les savants. Systeme de politique positive. Tome Quatrième. P.P. 137-175)は千八百二十五年に公にされたものであるが此の論文に於て吾人が彼の實證哲學及び實證政治學の發達を研究する上から見て、特に注意す可きは三状態の法則を證明せんとする彼の企圖、科學が實證的になる順序の考察、科學の位階的分類或は秩序の確立、社會物理學或は社會學の對象及び方法の論究、并に精神的或は靈的見地から社會を指導す可き

使命を有する實證學者即ち社會學者の社會的及び政治的役目の考察等である。要するに本論文は第三論文の補充と見做さる可きものである。而してかく見ることに由りて、吾人は又本論文の價値を正當に評價することが出来るので、第三論文に於ては獨斷的に論述されて居ることも、此處では稍々詳しく論證されて居るのである。

第五の論文「靈權の考察」(Considérations sur le pouvoir spirituel. Systeme de politique positive. Tome Quatrième. P.P. 176-215) は、千八百二十六年に公にされたものであるが、其の題名によりて察せられる如く、本論文は彼が先づ俗權と明確に分離され、而して之を指導す可きものと見る靈權、又社會改造の基礎として先づ確立さる可きものと見る靈權に就て特に考察したものである。コントは本論文に於ては、殊に彼の社會連帶思想を大に發達させて居るのであるが、併し本論文中に彼が論述して居ることは、實證哲學講義に於て更に組織的に詳しく論述されて居るものであるから、矢張り此處では之を述べることを省いて置く。

終りに第六の論文「昂奮に關するブルーセイの著作の吟味」(examen de traité de Bronsais sur l'irritation. Systeme de Politique Positive Tome Quatrième. P.P. 216-228) は、生理學に關するコントの思想殊に社會學と生物學との關係に關する彼の思想を研究するには、甚

だ有益なる資料である。併し彼の社會連帶思想の研究に就ては、直接には重要な意味を有しないものである。

却説コントの思想の發達の第一期、即ち準備期に於て、彼の實證哲學、社會學及び實證政治學の概念并に其の根本的思想は、以上述べし如くに大體上樹立されて居たので、隨ふて又彼の社會連帶思想も實質的には大體上立説されて居たのである。併し彼の社會連帶思想が公式的組織的に確立されたのは、彼の實證哲學の大成された第二期、即ち實證哲學講義に於てあり、又夫れが新社會組織の基礎として、實際的に充分に應用されたのは、第三期、即ち實證政治學體系に於てある。それで是れより第二節に於て、彼の社會連帶思想を其の大成せる形態に於て考察し、又第三節に於て其の實際的應用を考察し、終りに彼の社會連帶思想の概評を試みることにする。(未完)